木ノ宮遺跡

kinomiya site

1986

前橋市教育委員会

はじめに

前橋は、江戸時代において関東の名城厩橋城(前橋城)に譜代の大名である酒井氏、松平氏の居城した地である。

その後、養蚕・製糸の町として発展してきた。明治以降群馬県の県都として政治・経済・文化・教育・商工業の調和ある発展を期している。特に、住みよい町づくりを推進するとともに生涯学習社会を形成するために種々の施策を実施している。

木ノ宮遺跡は前橋市広瀬町に存在し本地域は旧利根川の流路の広瀬川右岸の河岸段丘上に存在する。かって本地域は１００余基の大小古墳が存在し、いわゆる広瀬古墳群を形成していた。しかし、昭和４０年代の初めに市民により良い住宅の確保を目的に宅地造成が実施され、その後、いわゆる列島改造論により一層の拍車がかけられた地である。

この遺跡周辺には、国史跡　八幡山古墳・県史跡　天神山古墳・市史跡　亀塚山古墳・金冠塚古墳等の古墳が存在する。

古代においては、上毛野氏の一族朝倉君の勢力圏の中心として栄えた地と推定される。

本遺跡は店舗建設に先立ち土地所有者・建設会社からの協力を得て調査を実施したものである。その結果、土坑、集石遺構等が発見されている。

この結果、広瀬古墳群を解明するための一資料が得られたものと考えられる。

本報告を刊行するにあたり加藤公則氏、関根幾二郎氏に多大なる協力をいただいた事に深甚なる感謝の意を表す次第であります。

本冊子が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

昭和６１年９月１日

前橋市教育委員会

教育長　岡本信正

目　　次

はじめに　　頁

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……1

Ⅲ　調査の経過……3

Ⅳ　層　　序……4

Ⅴ　遺構と遺物……4

Ⅵ　まとめ……6

例　　言

1．この報告書は、加藤公則氏(群馬県前橋市天川原町１４４)が建設する店舗建築予定地(群馬県前橋市広瀬町三丁目14－1,14－21における発掘調査に関するものである。

2．調査は、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係が担当し、高橋正男・桑原　昭・新保一美・前原　豊が参加した。また、調査にあたっては加藤公則氏・関根幾二郎氏に費用及び協力を得た。

3．本書の作成は、全体の討議をもとに前原　豊が執筆・編集にあたった。

4．本遺跡の略称は６１Ｇ４である。

5．遺構の略称は次の通りである。

　D…土坑

6．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

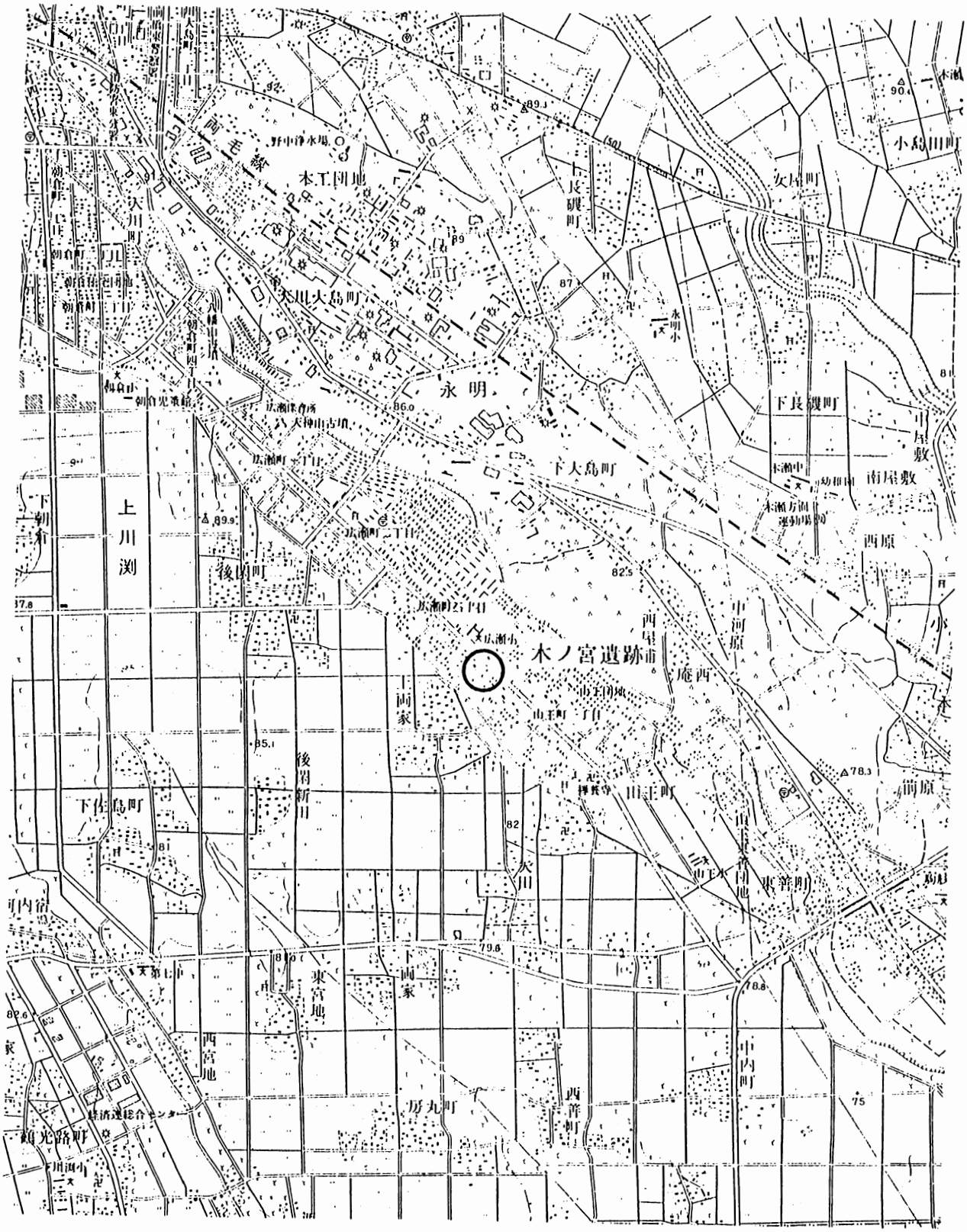
　遺構…全体図1/200，土坑1/60　　遺物…土器1/3

7．スクリントーンの使用は次の通りである。

　遺構平面図　　炭化物…斑

　遺物実測図　　須恵器断面…黒塗

fig. 1　木ノ宮遺跡位置図（1/50,000）



I　調査に至る経緯

昭和６１年３月５日付けで前橋市宅地開発事前協議審査会から、加藤公則氏より申請のあった宅地開発事前協議に対する意見書の提出方について依頼があった。３月２０日に前橋市教育委員会社会教育課で踏査を実施した結果、本調査地は古墳時代から平安時代の遺跡地である可能性が極めて高いことが判明した。そのため、４月１５日に調査地の東西・南北に幅１．２mのトレンチを３本設定し遺跡確認調査を実施した。その結果、平安時代の土坑１基を確認することができた。そこで、宅地開発申請者である加藤公則氏と協議・調整し前橋市教育委員会直営で発掘調査を実施することとなった。本遺跡の名称は旧地籍の群馬県前橋市西善町木ノ宮の地名を採用し木ノ宮遺跡(きのみやいせき)とした。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

木ノ宮遺跡が所在する群馬県前橋市広瀬町三丁目は前橋市街地である県庁付近から南東６kmの所にある。遺跡は広瀬団地を縦断する市道広瀬地区第２号線と市道の交差する南隅にあり、北向かいに前橋市立広瀬小学校がある。広瀬地区第２号線は広瀬団地の中央を北西から南東に通過しており、これと並行して北約１００mに主要地方道前橋－古河線がある。

前橋－古河線から本遺跡を望むと、比高３～５mの河岸崖が続くのが見える。この河岸崖は、遺跡の立地する前橋台地が古利根川に侵食されてできたもので、今もこの崖下に沿って広瀬川が流れている。本遺跡の標高は８６mを測り、北西から南西にかけてわずかな傾斜が見られる。かって、前橋天神山古墳をはじめとして多くの古墳が本遺跡が立地する河岸崖上縁辺に沿って分布していた。これらの古墳は南に広がる広大な前橋台地上の可耕地を背景として営まれたものである。

しかし、皮肉にも昭和４０年から４６年にわたって住宅団地造成が進められたため、そのほとんどの古墳が削平されてしまった。これは、広瀬団地の２９haに及ぶ造成区域と古墳群がオーバーラップしたためである。

2　歴史的環境

今回の調査によって、遺跡は奈良時代のものと判明したが、申すまでもなく、本地域は広瀬古墳群のほぼ中央に所在している。『上毛古墳綜覧』によると、現在の前橋市文京町から東善町の長さ６km、幅０．６kmのおよそ３km²にかけて存在した古墳の数は、１４９基を数えている。今でも残っているものは、西北端の不二山古墳から南東に向かって、天川二子山古墳、八幡山古墳、埋葬施設部分を残す天神山古墳、飯玉神社古墳、亀塚山古墳、耕作によって削られた墳丘を残す金冠塚古墳、文殊山古墳とその周辺の円墳、東南端に経塚古墳と数少ない。時期的には４世紀末から５世紀初期のものとして八幡山古墳、天神山古墳、朝倉Ⅱ号墳、５世紀前半から６世紀のものとして上陽17号墳、鳴巻塚古墳、亀塚山古墳、６世紀前半から終末にかけ天川二子山古墳、不二山古墳、金冠塚古墳が造営される。これ以後は特定古墳の造営はなくなり群集墳としての展開に

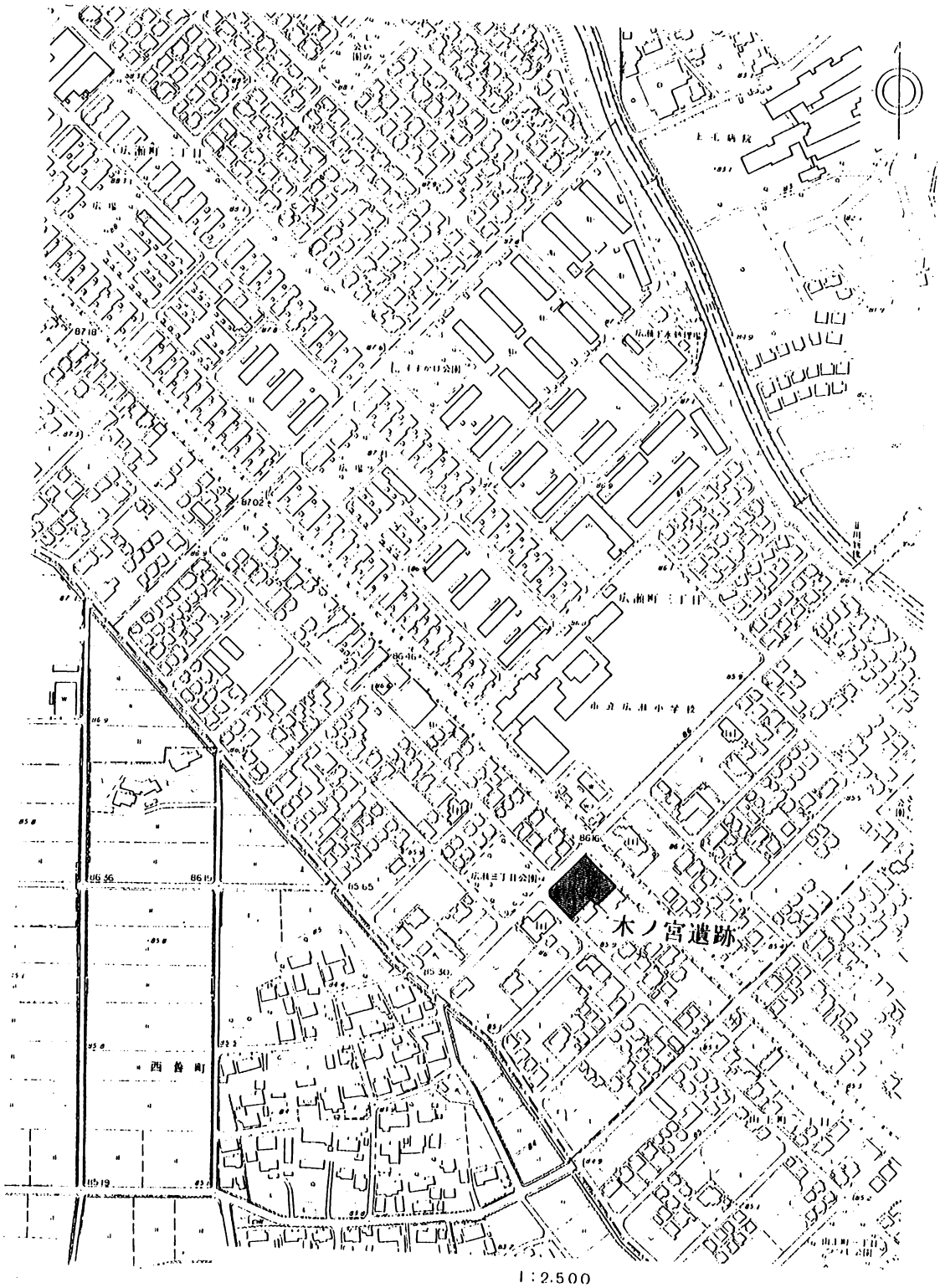


fig. 2　木ノ宮遺跡周辺図 (1/5,000)

移行する。(註１)

集落遺跡としては、後閑団地遺跡(註２)、坊山遺跡(註３)、後閑Ⅱ遺跡(註４)の調査がなされ古墳時代から平安時代の住居址が検出されている。また、本地域には、昭和２０年代の航空写真から大規模な条里地割が認められることから条里水田が今後検出されるものと期待される。また、女溝(註５)や鎮守廻り遺跡(註６)で確認された大規模の用水路もそれに伴って今後時期の判定がまたれる。

Ⅲ　調　査　の　経　過

１　試掘調査

試掘調査は昭和６１年４月15日(火)に開発予定地の東西、南北に幅1.2mのトレンチを3本設定し、０．4m³のバックフォーで最終的には浅間Ｃ軽石層まで掘削を行い、遺構・遺物の確認を実施した。その結果３トレンチより奈良時代の土坑、古墳・奈良時代の土器を検出できた。

調査結果から遺跡地であることが確認でき、木ノ宮遺跡と呼称することになった。遺跡の内容は３トレンチ以外からは全く遺構、遺物の存在が見られないことから遺跡は南東隅から開発予定地外に広がるものと考えられた。

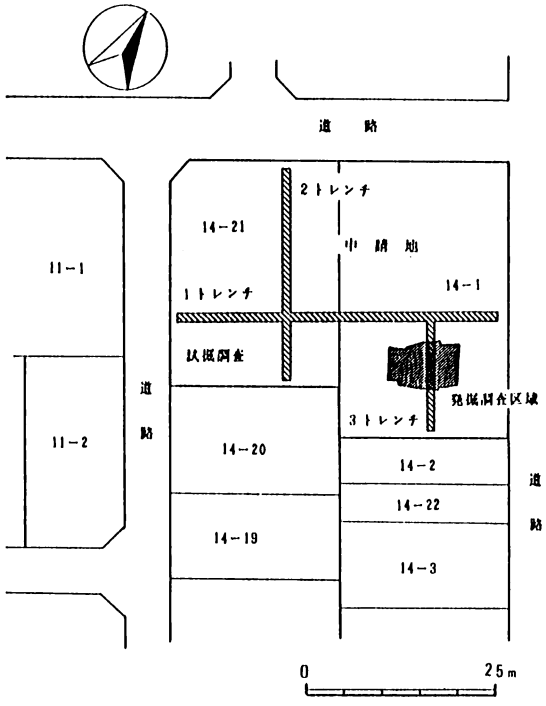


fig.3　木ノ宮遺跡調査区域図 (1/1,000)

しかし、試掘調査した範囲が限定されているため遺跡の取り扱いについては３トレンチ周辺については広げて発掘調査を実施し、その他については工事実施時に再度立ち会い調査を行い遺跡が発見された場合は発掘調査を実施することが協議により決定された。

２　発掘調査

発掘調査は、昭和６１年４月３０日と５月１日の２日間で実施した。調査経過の概要は、下記の通りである。

４月２８日　発掘調査準備

４月３０日　発掘調査開始・重機による表土掘削・プラン確認・グリッド設定

５月　１日　掘り下げ作業・遺構精査・遺構実測・全体図作成・全景写真撮影

５月　２日　遺物整理・図面整理の開始

この後立ち会い調査を昭和６１年７月２３日に実施したが遺物を始めとして遺構等の検出は全く出来なかった。従って、木ノ宮遺跡は古墳時代・奈良時代の遺跡と考えられ南東方向に広がり本調査区域は遺跡の外縁にあたるものと思われる。

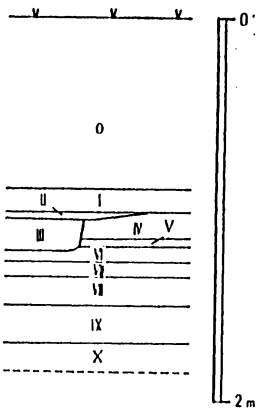


fig.4　木ノ宮遺跡
標準土層図（1/40）

Ⅳ　層　　序

今回の調査区域は、昭和４０～４６年に住宅団地造成が実施されており、旧来の地形を一部改変している。木ノ宮遺跡の立地する前橋台地は、北西から南東にかけて３／１０００程緩やかな傾斜を有する地形である。遺構は、地表から５０cmのＢ軽石下面の４層で検出された。０層…区画整理実施時の盛り土。Ⅰ層…旧水田耕作土。Ⅱ層…浅間Ｂ軽石純層、局部的。Ⅲ層…遺構（奈良時代の土坑）。Ⅳ層…褐色粘質土。Ⅴ層…浅間Ｃ軽石混土層。Ⅵ層…黒色粘質土。Ⅶ層…灰褐色粘質土。Ⅷ層…灰明褐色粘質土。Ⅸ層…ローム漸移層。Ⅹ層…砂質ローム層

Ⅴ　遺　構　と　遺　物

１　遺　構

木ノ宮遺跡から検出された遺構は、土坑２基、集石遺構１基である。これらの遺構のうちＤ－１号土坑については奈良時代のものと判明したが、他の遺構は所産時期を決定できる遺物が出土しなかったため、明確な時期の判定は下せない。しかし、Ｂ軽石層下の遺構検出のため奈良時代・平安時代のの所産と考えられる。以下、各遺構を概略的に見ていきたい。

Ｄ－１号土坑　Ｂ－３グリッドに位置する。平面形は、長軸がＮ－70°－Ｅに傾く楕円形を呈する。規模は長軸が1.2m、短軸1.0mである。確認面はⅡ層のＢ軽石層下であり、深さは0.16mと浅かった。

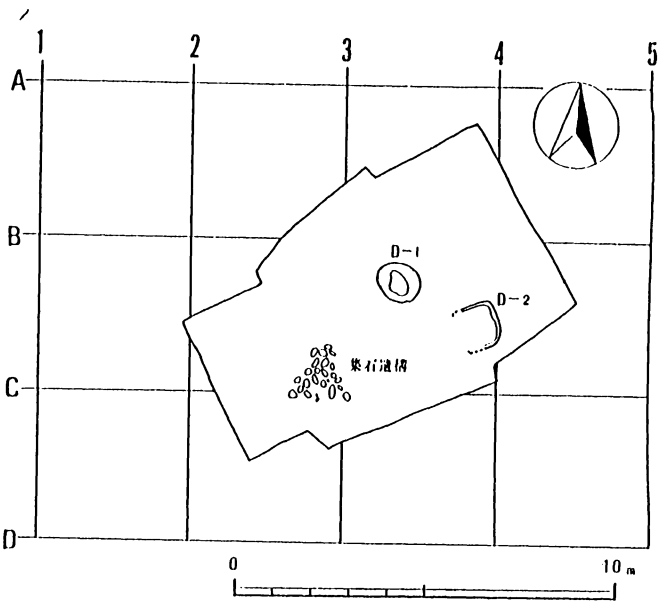


fig.5　木ノ宮遺跡全体図（1/200）

構築土はⅣ層の褐色土であったが、覆土とは、容易に区別がついた。覆土は１層…黒褐色微砂層、２層…黒褐色微砂層、３層…黒色微砂層・炭化物30％混入、でともに粘性、締まりを有する。出土遺物はfig.７－２，３の須恵器が出土。

Ｄ－２号土坑　Ｂ－３・４グリッドに位置する。平面形は、長軸がＮ－74°－Ｅに傾く長方形呈すると考えられる。規模は長軸が(0.9)m、短軸1.2mである。確認面はⅡ層のＢ軽石層下であり、深さは0.08mと浅かった。構築土はⅣ層の褐色土であったが、覆土とは、容易に区別がついた。覆土は１層…暗褐色微砂層で粘性やや強く締まりがあった。出土遺物は見られなっかた。

集石遺構　Ｂ・Ｃ－２・３グリッドに位置する。平面形は長軸がＮ－66°－Ｅに傾く三角形を呈する。規模は長軸が1.69m、短軸1.53mである。確認面はⅡ層のＢ軽石層下であり、河原石を２６個、ほぼ平坦に敷き詰めている。河原石は径20cm程の偏平の物を中心に用いており、その下部に不整形な掘り方が見られた。掘り方は長軸1.74m、短軸1.5m、深さ0.15mの規模を持ちＮ－65°－Ｅに主軸を持つ。中央に径３０cm、深さ６cmのピットを有していた。出土遺物は見られなかった。

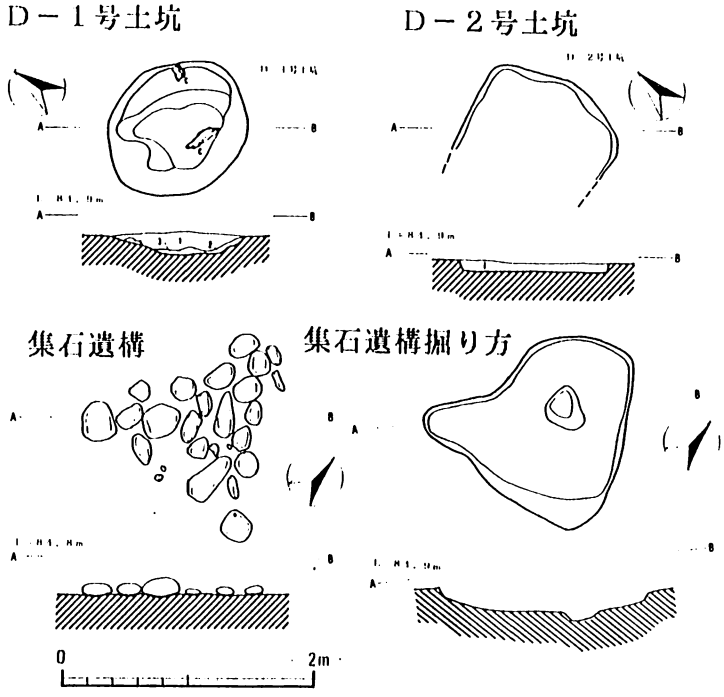


fig.6　木ノ宮遺跡遺構図（1/60）

２　遺　物

木ノ宮遺跡の出土遺物は土師器杯、須恵器杯、須恵器長頸壺の３点がある。

土師器杯(１)　口径11.1cm、器高3.0cmを計る。口辺はわずかに外稜を有し立ち上がる。外面の調整は口辺部横撫で、底部箆削り、内面は横撫でによって仕上げられる。色調は橙色(6/8 2.5YR)を呈し、胎土は密で焼成良好。１／２現存。Ｂ－２グリッド出土。

須恵器杯(２)　口径14.2cm、底径9.6cm、器高3.6cmを計る。口辺は外傾しながら直線的に立ち上がる。内外面とも轆轤整形によって仕上げられる。体部下半に自然釉が見られる。底部は回転箆切りにより轆轤から切り離される。色調は灰白色(N　7/10)を呈し焼成良好である。1/2現存。Ｄ－１号土坑出土。

須恵器長頸壺(3) 口辺部を欠損しており、全体の器形は不明。胴部の最大径11.1cm、底径5.5cm、現存する器高6.1cmである。肩部に1条の凹線が施される。外面の体部下半と底部に箆削りがなされる他は轆轤調整で仕上げられる。色調は灰白色(7/1 2.5Y)、胎土・焼成とも良好。D－1号土坑出土。

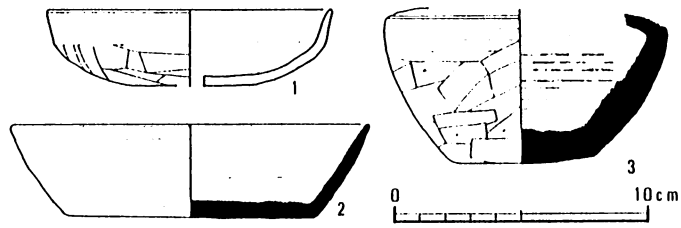


fig.7 木ノ宮遺跡出土遺物実測図 (1/3)

Ⅵ まとめ

木ノ宮遺跡は広瀬古墳群のほぼ中央に位置している。かって周辺には全長80mを超す前方後円墳の上両家二子山古墳を始めとして、オトウカ山古墳、乞食塚古墳が存在していた。今回の調査地内にこのオトウカ山古墳が所在していた筈であるが、1トレンチ東端に人頭大の河原石がまとまって見られた以外、その存在を明確にさせるものの検出はなかった。前橋市文化財調査報告書第1集(註7)によると、オトウカ山古墳は復元径30m、高さ3.5m余りであり円墳と推定されている。墳丘の1／3は過去に削られ、残りを道路によって掘削された様であり、周溝、埋葬施設、葺石は攪乱により確認されていない。

今回の調査に際、B－3グリッド周辺に浅間B軽石の純層が堆積しており、その他には全く存在を認められなかった。オトウカ山古墳の墳丘を30mとし、周溝6～8mとするとB軽石の堆積部は墳丘から周溝にかかる位置となる。このことからオトウカ山古墳の周溝はプランとしては明瞭に確認できなかったが存在するものと考えられる。また、単独で出土した土師器杯(fig. 7－1)はオトウカ山古墳の周溝内出土の可能性も考えられる。この土師器杯は古墳時代鬼高Ⅲ式の所産と考えられ、土坑出土の土器より先行するものである。

また、D－1号土坑については出土した土器から奈良時代のものとされる。完形土器や覆土に炭化物が見られることから、墓壙の可能性が強い。かかる類例だが若干時期が異なるが、管見する範囲で高崎市中尾遺跡26号土壙(註8)、藤岡市小野地区遺跡群CD－1号土壙(註9)が平安時代のものであるがあげられる。中尾遺跡の場合は人骨が出土しており明らかに墓壙であり副葬品として須恵器坏が1点出土している。墓から出土する汁飯献具は死者が死後の世界に赴くために食事を摂るために最も必要とされるものである。(註10)

この他にD－2号土坑、集石遺構があるが、遺物の出土がないため時期等の断定ができないが、遺構の確認状態から推定すれば奈良時代・平安時代にちかいものと考えられる。

なおfig. 8～10の挿図は区画整理第1課保存の区画整理計画図(1/1,000)と区画整理前宅地図(1/500)をもとに前橋市文化財調査報告書第1集、上毛古墳綜覧、金冠塚(山王二子山)古墳調査概

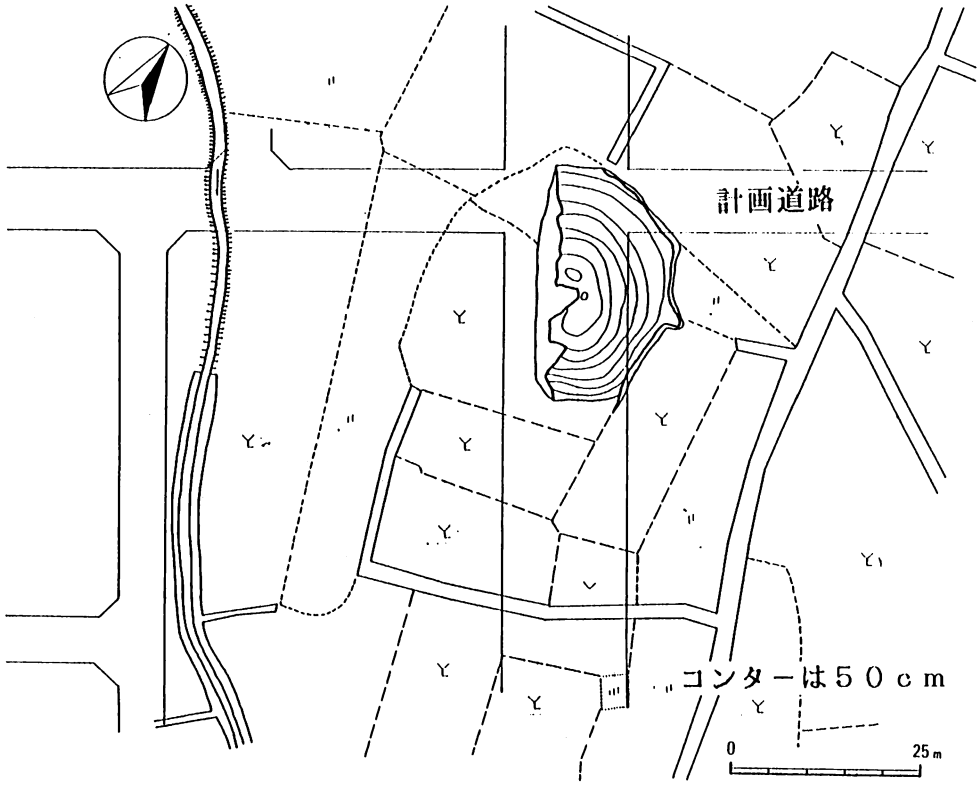


fig.8　オトウカ山古墳測量図（1/1,000）

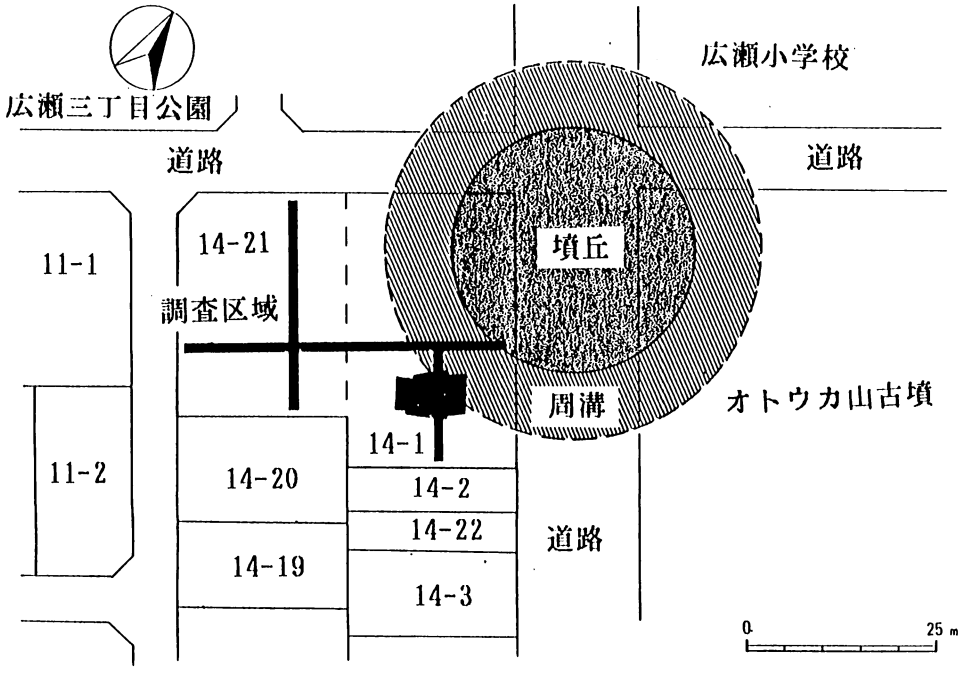


fig.9　オトウカ山古墳復元図（1/1,000）

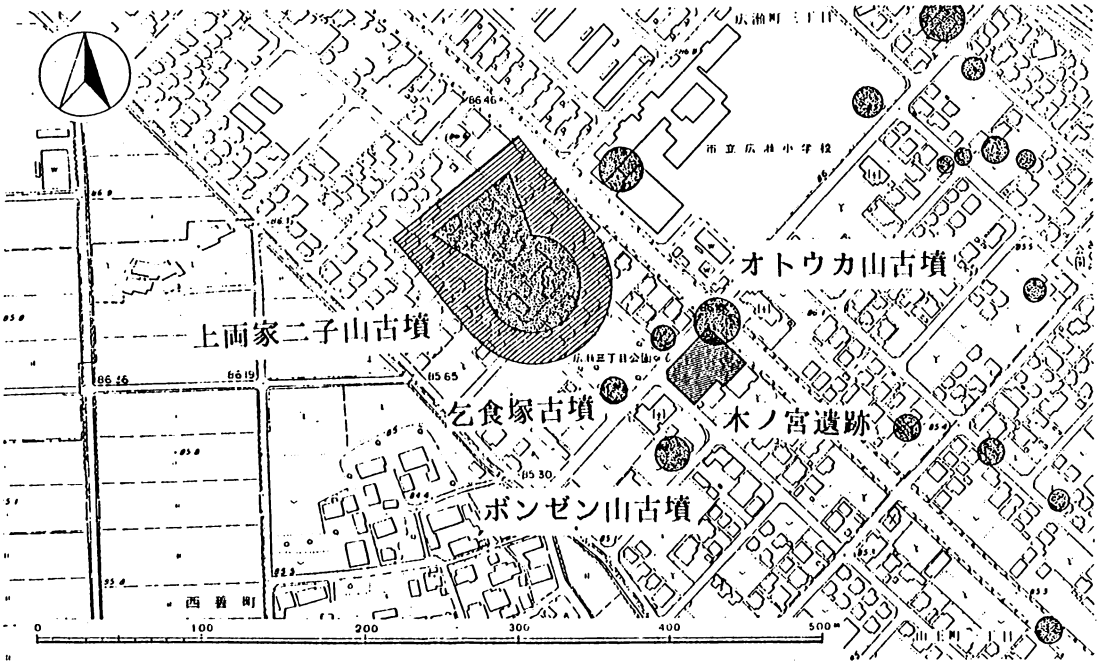
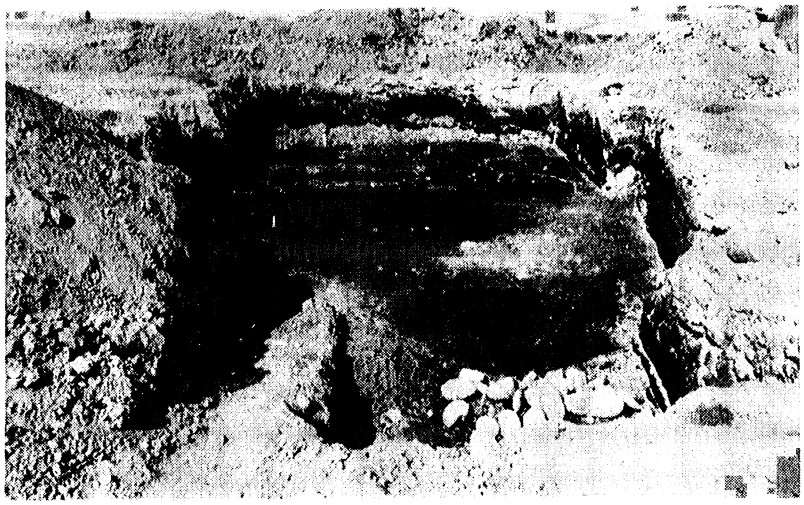


fig.10　木ノ宮遺跡周辺の古墳分布図(1/5,000)

報を参照して作成した。fig. 9におけるオトウカ山古墳の周溝の規模はあくまでも推定である。今後、これらの資料と航空写真、耕地図をもちいれば古墳の正確な位置や規模のわりだしも可能なことといえる。

註

1　「上毛古墳綜覧」(群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯)　群馬県　1938
　尾崎喜左雄ほか　「前橋市史」　第1巻　1971
　松本浩一ほか　「金冠塚(山王二子山)古墳調査概報」前橋市教育委員会　1981
　梅沢重昭　「前橋天神山古墳群」「探訪 日本の古墳 東日本編」有斐閣　1981
2　林　喜久夫　「後閑団地遺跡」　前橋市教育委員会　1983
3　福田瑞穂・江部和彦　「坊山遺跡」　前橋市教育委員会　1984
4　林　喜久夫　「後閑Ⅱ遺跡」　前橋市教育委員会　1984
5　前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係により昭和60年度調査を実施。
6　高橋正男・前原　豊　「鎮守廻り遺跡」　前橋市教育委員会　1986
7　松島栄治・笹岡規雄　「広瀬団地古墳群発掘調査報告」「前橋市文化財調査報告書第1集」　前橋市教育委員会　1970
8　古郡正志ほか　「小野地区遺跡群発掘調査報告書」　藤岡市教育委員会　1982
9　坂口　一・三浦京子　「中尾遺跡」　群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
10　桐原　健　「土壙出土緑釉陶器の性格」　信濃38－9　1986



木ノ宮遺跡全景

西から

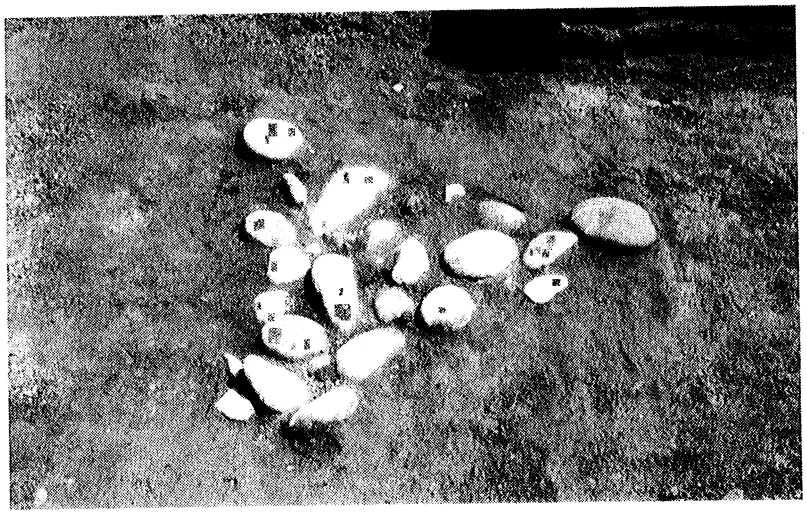
木ノ宮遺跡全景

東から

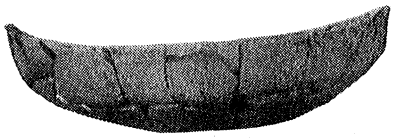
D－1号土坑

東から

集石遺構
北から



集石遺構掘り方
西から



B－2グリッド

D－1号土坑

D－1号土坑

調査要項

遺跡名称	木ノ宮遺跡(きのみやいせき)
遺跡所在地	群馬県前橋市広瀬町三丁目14－1，14－21
遺跡記号	61G4
調査期日	表面調査　昭和61年3月20日
	試掘調査　昭和61年4月15日
	発掘調査　昭和61年4月30日・5月1日
	立ち会い調査　昭和61年7月23日
調査面積	約156㎡
開発面積	1,442㎡
調査原因	民間開発(店舗建築)
調査依頼者	前橋市天川原町144番地　加藤公則

調査主体者　前橋市教育委員会　教育長　岡本信正

事務局　教育次長　奈良三郎　社会教育課長　米倉　忍　社会教育課長補佐　中嶋隆二
鈴木幸三　生涯学習担当主幹　加藤鶴男　文化財保護係長　福田紀雄
管理係　主任　近藤尚子　田中靖行　主事　小島順子　松本　卓

文化財保護係　係長　福田紀雄　主査　前原照子　主任　濱田博一　遠藤和夫　高橋正男
井野修二　前原　豊　桑原　昭　中野和夫　主事　中野　覚　関根吉晴
福田瑞穂　原田和博　嘱託員　新保一美　加部二生

発掘調査
担当者　高橋正男　桑原　昭　新保一美　前原　豊

木ノ宮遺跡(61G4)

印刷　昭和61年9月　1日
発行　昭和61年9月12日
発行者　前橋市教育委員会　前橋市大手町2－12－1
印刷所